

「かきまぜの春」

徳島県 櫻川 ふみ様

割烹着姿の祖母が炊き上がったご飯に、ささっと酢をかけて、うちわで素早く冷ます。炊いていた具材を入れてかきまぜるとでき上がり！ 一般の五目寿司だが、徳島では「かきまぜ」と言う。

祖母の寿司飯にはすだち果汁を入れていたので、甘く煮た金時豆とよい相性だった。私は息子を出産しても仕事を続けていたので、祖母がお守りをしてくれていた。曾ばあちゃん子の息子も、「かきまぜ」が大好物であった。

「僕が転職したら、銀座の寿司屋につれて行ってあげるよ」と言っていたが、念願のデザイナーになった時、祖母はもういなかった。

グラフィックデザイナーとして三年目の春を迎えた頃、突然病魔に襲われた。柔道で鍛えた逞しい体なのに血液が侵かれていた。

入院と同時に抗がん剤治療が始まった。息子は持って行き場のない思いをパソコンにぶつつけるようにCG作品を創作していった。

愚痴は一切言わず、いつも前向きだった。

東京の息子と徳島の私を繋ぐのは、当時珍しい携帯電話、鞆の中で震えながら鳴った。

「副作用で何も食べられないけど、「かきまぜ」だったら食べられそう。」

「分った。明日飛行機で持っていくよ」

『どうか食べられますように』と祈りながら祖母秘伝の「かきまぜ」を作り、朱塗りの重箱に詰め、錦糸卵の上に花ソーセージを3つのせた。

近所のスーパーで見つけたのだ。病室から出られない息子に春を届けたかった。息子は「おっ！サクラさいたか。これはばあちゃんの「かきまぜ」にはなかったよ」と言いながら一番に花ソーセージを食べた。どんどん食べた。一粒も残さず食べくれた。その後も、徳島から東京へと、「かきまぜ」は飛んだ。

骨髓移植手術が成功して無菌室を出た時、息子は「闘病中に描いた作品の個展を開く。『生

きるよろこび展』だよ」と瞳を輝かせた。

京都で就職していた娘から「私の人生で今何をするのが大事か、考えて決めた」との電話。娘は会社を退職して上京し、息子の看病をしながら個展の準備をしてくれた。

徳島と東京の二会場で開いた個展は、新聞各紙やテレビ局が放送して下さったお蔭で、思いがけなく大勢の方が来場して下さった。「勇気をもらった」「希望の力を感じた」等暖かく嬉しい声に、私は胸が满满的。

ふるさと徳島に帰ってきた時も「かきまぜ」を作った。「あれ、のせてよ」が合言葉になっていた。花ソーセージは希望の春を届けてくれる魔法の花びらのようで、息子は、

「ばあちゃんに、母さんの「かきまぜ」の進化を見せてあげたいな」と得意がっていた。

あれから二十二年、今年も一月に県の女性団体が息子の遺作展を開催してくださった。

「人生は何年生きたかというより、何人の人に感動を与えたか」「絵の中に生き続けているよう」などの感想を頂くことができた。

もうすぐ彼岸、「あれ、のせてよ」との声が聞こえてきた。仏前にお供えするからね！